

百年目の LØVE ALL

～特集・新しいテニスのまちへ～

全国に誇る施設、全国レベルの選手たち
そう、この町は「テニスのまち」だ。
叫ばれる交流人口の拡大、町の活性化、健
康づくりにテニス果たす役割は予想以
上に大きい。
今、もう一度テニスを見直そう。
そして、みんなで考えよう。
新しい「テニスのまちづくり」を――

能登 CONTENTS

目次

平成 19 年 12 月号

百年目のLØVE ALL ～特集・新しいテニスのまちへ～	3
人の間に Vol.18 第 2 回町顕彰条例表彰を受賞した三宅セツ子さん	24
秋の褒章・叙勲、大臣表彰 など	26
まちのできごと 町民文化祭／寺田川ダム竣工式／いどり祭り／ 久田船長碑前祭／防火パレード／松波城趾情報館／ 羽根万象先生を偲ぶ会 など	28
くらしの掲示板 お知らせ／募集／催し／相談／能登町クイズ 100 選 能登丼コンテスト など	32
文化&スポーツ案内・結果	36
図書館・児童館案内 遊々能登～奥能登イベント情報～	37
安心安全まちづくり／国民年金のはなし／入札結果	38
健康インフォメーション	40
有線テレビ番組案内 町民文化祭芸能部門放送内容	42
こせきのまど／寄付／人口動態	43



◀今月の表紙

藤波運動公園で毎日のように練習する能登ソフトテニススポーツ少年団。試合を控えた選手たちはコーチの指示を受け、真剣に練習していた。



3
大正～昭和～平成のラケット



24
町顕彰条例表彰受賞



26
藍綬褒章



31
松波保育園園児による防火パレード

第1章 築かれた伝統



かつて旧能都町は「テニスの町」を宣言し、ソフトテニスは「町技」と呼ばれていた。多くの先人たちの汗と涙が築きあげた伝統。その歴史を紐解く。

写真：昭和2年、能奥庭球リーグ戦で全勝した牛湾倶楽部（宇出津）

伝統の礎は、百年前に遡る

板テニスから軟式テニスへ

明治40年ころ、鶴川地区の小学生たちは放課後に神社やお寺、小学校の運動場の片隅で板で作ったラケットと手まりでテニスのまねごとをしていたといわれている。

能登町における正式な軟式テニスの発祥は大正3年、井東節太郎氏が鶴川尋常小学校に赴任し紹介したことに始まる。その後、鶴川を中心に瑞穂、三波宇出津と尋常小学校のある地域へ拡大していった。

盛んになった学童テニス

学校を中心に普及したテニスは各地で社会人を対象とした庭球団が結成されるなど次第に地域に根ざしていった。

各小学校主催の学童庭球大会では、珠洲・穴水・柳田・小木などの学校からも参加があったと記されている。また大正15年から開催された石川県学童大会では、第14回の大会まで鶴川が

優勝4回、宇出津と瑞穂が1回という成績を残し、現在の礎は、この時に築かれたといえる。

戦後復活期と中学生の活躍

戦争のため禁止されていたテニスは、昭和22年の第2回石川県体を機に各地で復活した。

昭和20年に宮地中学校に赴任した武淵一男さんは、生徒に勇氣と自信と積極性を持たせようとテニスを教えることを決意した。武淵さんは「戦争直後の運動場は一面芋畑でテニスどころではなかった。畑をコートにするのは本当に苦勞した」と当時を振り返る。そして宮地中学校は昭和25年の県大会で1位、2位を独占。「生徒たちは何事にも自信を持つようになった。それ以降ソフトテニス教育にも役立つと思ひ、夢中になってやった」ということだ。

「練習に泣いて試合で笑え」という信念のもと厳しい練習をさせたという武淵さんだが、「自分が教える生徒はできるだけ3年間担任として持ち上がり、勉

強から健康管理、精神面まで気を配っていた」という。

昭和20年代から30年代は鶴川・瑞穂・宮地中学校が中心だった中学校のテニスだが、昭和38年に太島彰信さんが能都中学校（当時宇出津中学校）に赴任してからは、能都中学校と鶴川中学校の全盛期が続いた。

武淵さんは現在のテニスの状況について「勝つことが当たり前のように思われるが決してそうではない。伝統を築いた人たちの苦勞も理解してあげないといけない」と語った。

武淵 一男さん

【むぶち・かずお】山田 中学生の育成に情熱を注ぎ、今日の礎を作った一人。県中体連役員としても活躍しテニスの普及に尽力した。82歳。



History of Tennis

能登町テニスの歴史

- 1907 (明治40)年 鶴川地区で小学生たちが板ラケットと手まりで遊ぶ(板テニス)
- 1914 (大正3)年 井東節太郎氏が鶴川尋常小学校に赴任し、正式にテニスを紹介
- 1921 (大正10)年 鶴川庭球団、宇出津庭球団が結成
- 1923 (大正12)年 瑞穂庭球団、三波庭球団が結成
- 1925 (大正14)年 三波小学校主催、能奥学童庭球大会開催(優勝・三波小学校)
- 1926 (大正15)年 宇出津尋常小学校創立50周年記念庭球大会(優勝・瑞穂小学校)
- 1927 (昭和2)年 第2回石川県学童大会で河合大八・川端正治組(鶴川小)が優勝
- 1928 (昭和3)年 第3回大会で神和住 正・馬渡勇組(宇出津小)が優勝
- 1932 (昭和7)年 第7回大会で仲谷進之介・中田作之助組(鶴川小)が優勝
- 1936 (昭和11)年 第11回大会で宮本清次郎・赤崎義雄組(瑞穂小)が優勝
- 1937 (昭和12)年 第12回大会で篤猛雄・馬場清次組(鶴川小)が優勝
- 1938 (昭和13)年 第13回大会で葛西健次・馬場清次組(鶴川小)が優勝
- 1947 (昭和22)年 第2回石川県国体開催、ソフトテニスは七尾市鳳珠郡軟庭協会結成(輪島市含む)
- 1949 (昭和24)年 第1回石川県体育大会
- 1951 (昭和26)年 第1回石川県総合体育大会
- 1952 (昭和27)年 鶴川町小・中学校テニス大会開催(PTA主催)
- 1953 (昭和28)年 第2回県大会で男子高岸・牧組(鶴川中)優勝
- 1955 (昭和30)年 第3回県大会で男子高岸・牧組(鶴川中)優勝
- 1958 (昭和33)年 女子森川・橋本組(鶴川中)が優勝
- 1964 (昭和39)年 第5回県大会で男子七波・黒津組(鶴川中)優勝
- 1966 (昭和41)年 第6回県大会で女子長道・佐々木組(鶴川中)優勝
- 1967 (昭和42)年 第7回県大会で男子仲谷・馬場組(鶴川中)優勝
- 1971 (昭和46)年 女子酒元・山本組(宮地分校)が優勝、以後3連覇優勝、以後2連覇
- 1972 (昭和47)年 第8回県大会で女子山辺・府波組(能都中)優勝
- 1973 (昭和48)年 第16回県中学校大会から団体戦が始まり、男子鶴川中、女子能都中が優勝。以後団体戦個人戦において鶴川中、能都中が上位を占める
- 1977 (昭和52)年 能都町軟式庭球協会発足
- 1978 (昭和53)年 神和住杯争奪庭球大会開催
- 1979 (昭和54)年 第2回全日本少年少女軟式庭球大会で大屋しのぶ・二谷圭子組(能都中)が準優勝。石川県勢初の全国大会入賞となる
- 1983 (昭和58)年 県中学校体育大会で能都中が完全優勝
- 1984 (昭和59)年 第1回石川県小学生軟庭大会を能都町で開催
- 1985 (昭和60)年 第1回国際ジュニア選抜親善大会(千葉県で鶴川中(男子)が優勝)
- 1986 (昭和61)年 第8回全国中学校体育大会で佐々木伸治・奥野成文組(能都中)が優勝
- 1987 (昭和62)年 能都町スポーツ少年団が誕生
- 1988 (昭和63)年 6月、全日本ジュニア大会(北海道)で刈崎満・石田茂樹組(宇出津高)が優勝
- 1989 (昭和64)年 8月、全日本高校選手権大会(滋賀県)で刈崎満・石田茂樹組(宇出津高)が優勝
- 1990 (昭和65)年 県立能都健民テニスコート(16面)が竣工
- 1991 (昭和66)年 第38回全日本大学対抗軟式庭球選手権大会(インカレ)開催
- 1992 (昭和67)年 第1回全日本小学生軟式庭球選手権大会(千葉県)で西祥子・石井里江子組(宇出津小)が優勝
- 1993 (昭和68)年 山田良平氏死去
- 1994 (昭和69)年 全日本高等学校軟式庭球選手権大会(インカレ)開催
- 1995 (昭和70)年 第2回全日本小学生軟式庭球選手権大会で(千葉県)で男子団体優勝
- 1996 (昭和71)年 12月議会において「テニスの町宣言」を決議
- 1997 (昭和72)年 第1回山田杯争奪軟式庭球選手権大会開催
- 1998 (昭和73)年 明治大正会・第4回石川県能都大会開催

「テニスの町」を宣言した町

宇出津高校の黄金時代

「宇出津高校から日本一の選手を」という目標を掲げ、昭和45年から山田良平氏（故人）が宇出津高校の指導者となった。以後16年間、宇出津高校は県大会で男子団体10連覇を含む12勝、女子も6連覇を含む11勝を挙げた。昭和54年には滋賀県長浜市で開催されたインターハイソフトテニス競技で、宇出津高校の刈崎・石田組が見事優勝し念願の高校生日本一に輝いた。

16面完成 全国大会誘致へ

昭和58年、藤波台地に能都健康テニスコートが完成した。「産業のない町に全国大会を誘致することで町を活性化させたい」という大森稟世町軟庭協会会長（故人）の考えを受け、旧能都町教育委員会はテニスコート完成前から大会誘致に全国を奔走した。当時社会教育課長だった馬渡武久さんは「健民コート開場時には3年後までの3つの全

国大会、ブロック大会2つ、県大会11の開催が決まっていた」と振り返る。

昭和59年夏にインカレ、翌60年にはインターハイ、62年から全日本小学生軟式庭球大会を3年連続開催、平成2年には全日本実業団と毎年のように全国規模の大会を誘致して実績を挙げた。

「インカレのときは1週間延べ8600人が宿泊して、町の焼肉店や寿司屋から肉やネタがなくなつた。インターハイでは抽選会を地元で、しかもあはれ祭の日につづけてやった。これで『能登はすごいところ』という印象を与えることができたと話す馬渡さん。「地元が強いから大会が誘致しやすいし、合宿にも来る。選手にも地元出身者がたくさんいたし、本当にやりやすかった」という。

国体の開催と成功

「最終目標は国体の開催」と掲げた町は、昭和60年12月議会において「テニスの町宣言」を

決議、官民一体となって国体開催を県下市町村や関係団体に陳情した。各種全国大会の実績や町ぐるみの協力体制が評価され、ついに国体の開催地に内定。平成2年には「雨でも大会ができる」よう当時日本一の屋内テニスコート「WAVEのと」を完成させ、平成3年の国体は成功裏に終わった。

馬渡 武久さん

【まわたり・たけひさ】宇出津元役場職員。昭和63年に社会教育課長から国体室長となり、テニスの大会誘致、国体の準備に全力を注いだ。69歳。



テニスの列伝 I

町にテニスを伝えた

井東 節太郎

Ito Setsutarou (1891 ~ 1944)



町

に本格的なテニスを伝えた井東節太郎氏は金沢の社会人スポーツクラブ「金城団」に所属し、県のトッププレーヤーとして活躍していた。明治43年に東京師範学校に入学し、能登町においては鶴川、宇出津、三波小学校に赴任して軟式テニスの普及に力を尽くした。

大正10年ごろには、鶴川、宇出津、瑞穂、三波で次々と社会人による庭球団が結成、庭球団主催の大会も各地で行われた。宇出津庭球団（のちに牛湾倶楽

部として再結成）は井東氏が発起人となり14人で結成された。また宇出津小学校の指導者として、神和住正・馬渡勇組を第3回石川学童大会優勝に導いた。

武淵一男さんは井東氏の親戚にあたり、師範学校時代の井東氏との思い出を語ってくれた。「わたしが師範学校1年のころ、井東先生が金沢に来ると必ず訪ねてきてテニスを指導してくれました。当時のテニスは何十本もラリーを続けるという時代で、いかにも軟式テニスらしい打ち方を指導してもらった」。

大

正3年、宇出津に生まれた神和住正氏は、宇出津小学校でテニスに没頭していた。昭和3年の石川学童大会で優勝したときは、船で故郷に錦を飾り町内を華々しくパレードしたと語り継がれている。その後東京へ渡り、都庁に勤務しながら正確なストロークと沈着な試合運びで日本のトッププレーヤーとなった。昭和42年まで選手として活躍しながら日本軟式庭球連盟常務理事として軟式テニスの普及・指導に尽力した。妻の静子さんは旧

鹿島町の出身で全日本チャンピオン。その息子である純さんは、高校、大学、社会人と硬式テニスで日本一になり日本テニス史上初のプロ選手となった。

神和住正氏が「宇出津小学校100年のあゆみ」の中に寄せた手紙の結びには、こう記されている。「能都町で今もテニスの伝統を受け継ぎ、いつの日か栄光の日本一を目指して精進している人たちがいる。わたしたちの歩んできたハイオニアのことが決して無駄でなかったことが何よりも嬉しい」。

テニスの列伝 II

歴史の礎を築いた

神和住 正

Kamiwazumi Tadashi (1914 ~ 1999)



1987(昭和62)年

1988(昭和63)年

1989(平成元年)

1990(平成2)年

1991(平成3)年

1992(平成4)年

1993(平成5)年

1995(平成7)年

1997(平成9)年

1998(平成10)年

1999(平成11)年

2000(平成12)年

2001(平成13)年

2004(平成16)年

2005(平成17)年

2006(平成18)年

2007(平成19)年

第3回全日本小学生軟式庭球選手権大会(千葉県)で石田晋也・高崎半津郎組(三波小)が優勝
第4回全日本小学生軟式庭球選手権大会開催
第5回全日本小学生軟式庭球選手権大会開催
男女団体アベック優勝、男子個人橋本信康、榎繁治組(鶴川小)が優勝

関西実業学生連盟硬式庭球大会開催
第6回全日本小学生軟式庭球選手権大会開催
第1回ヨネックス杯北信越中学校研修大会開催、男子で能都中が優勝

屋内テニスコート「WAVEのと」が完成。テスト試合、第15回北信越高校インドア大会開催
全日本実業団大会開催(国体リハーサル大会として)

第46回石川国体開催。石川県が男女総合優勝、女子総合優勝
東日本選手権大会開催

第23回全国中学校ソフトテニス大会開催
国際ルールが採択され軟式庭球からソフトテニスへ

都道府県対抗中学生ソフトテニス大会男子団体で石川県代表が優勝(瑞穂中から高山と広瀬、能都中から久田と山辺が選抜)

町政40周年記念事業として神和住純氏を迎えて「24時間ぶつとおし町民テニス大会」を硬式テニスで行う。「テニス資料展」同時開催

第12回全日本小学生ソフトテニス選手権大会で小西真希子・坂亜沙美組(宇出津小)が優勝
大森稟世氏死去

第13回全日本小学生ソフトテニス選手権大会(宮城県)で竹内志津・丸谷佳代(鶴川小)が優勝

都道府県対抗中学生ソフトテニス大会女子団体で能都中・鶴川中の合成チームが優勝
第28回全国中学校ソフトテニス大会(徳島県)で小西真希子・久本香代組(能都中)が優勝

北信越中学校総体で能都町勢が完全優勝
第29回全国中学校ソフトテニス大会(福島県)で小西真希子・坂亜沙美組(能都中)が優勝
神和住正氏死去

県高校総体で宇出津高校が男女団体、個人共に優勝
健民コートがクレーから砂入人工芝へ

日韓交流団 韓国へ
石川スポレク祭ソフトテニス競技会場

北信越高校大会で宇出津高校が男女アベック優勝
神和住純エンジョイテニスフェスティバル開催

第3回全国小学生ソフトテニス大会(千葉県)男子4年生以下の部で寺下光平・浜高彰仁組(鶴川小)が優勝、女子5年生の部で二田早智子・谷内萌組(宇出津小)が優勝

第21回全日本小学生ソフトテニス選手権大会(山形県)女子個人で二田早智子・谷内萌(宇出津小)が優勝、団体で石川県代表が優勝(宇出津小から二田・谷内・佐々木、真脇小から寺越が選抜)

第4回全国小学生ソフトテニス大会(千葉県)女子4年生以下の部で佐々木美和・山瀬侑希組(宇出津小)が優勝

全日本学生選手権大会開催
第5回全国小学生ソフトテニス大会(千葉県)女子5年生の部で佐々木美和・山瀬侑希組(宇出津小)が優勝

全国ジュニア王座決定ソフトテニス大会(三重県)鶴川中男子が準優勝、能都中女子が優勝
第23回全日本小学生ソフトテニス選手権大会(高知県)女子個人で佐々木美和・山瀬侑希組(宇出津小)が優勝

JPTA能登国際女子オープンテニス開催
第38回全国中学校ソフトテニス大会(宮城県)で二田早智子・佐々木真子組(能都中)が準優勝

選手の気持ち



鵜川小学校 6年
清水 寛生 さん (柿生)

Shimizu Kansei

大会で上位入賞している兄貴たちを見て格好いいと思い、小学校1年からテニスを始めました。中学校へ行ってもテニスを続けて北信越大会に出場したいです。



能都中学校 1年
佐々木 美和 さん (宇出津)

Sasaki Miwa

テニスは、お姉さんがやっていたので小学校1年生から自然と始めました。今はテニスも勉強も両方頑張れるようになりました。目標は能都中のみんなと全中に出場することです。



能都北辰高校 3年
高宮 大介 さん (波並)

Takamiya Daisuke

テニスを通じて「あきらめない心、流されない気持ち、他人への感謝」を学びました。大学へ進学しても大好きなテニスを続けて、国体メンバーに選ばれるよう頑張りたいです。

伝統を守っていききたい
ソフトテニス部の顧問として全国大会や各種の大会に参加していると感じることは、能都中学校ソフトテニス部の「伝統の力」です。その意味で伝統を築

いてくれた先輩たちや指導者に感謝せずにはおられません。現在の部員数は1年生女子が7人と少ないですが、月曜日と水曜日の週2回は能都北辰高校の部員と合同練習も行っています。「練習が厳しいのでは」とよく質問されますが、時間はほかの部と変わらず学校で決められた時間に終わり、練習試合に出かけることもありません。

わたしも部員たちも、4月になり新入部員が入ってくることを楽しみにしています。テニスの経験は問わないし関係ありません。新入部員を迎えて「学校生活が1番で、テニスは2番目」「先輩と後輩の壁がなく、先輩が優しい」などの能都中学校ソフトテニス部の伝統をこれからも守っていききたいと思っています。

石川国体や石川インターハイに向けて汗や涙を流した先輩たちを思うと、熱い気持ちや責任感が頭をよぎります。今後は地域の人たちや地元の小中学校とも連携して、ソフトテニスを通して能登町を全国に発信できるように選手たちと一緒に努力したいと考えています。

夕日が沈みテニスボールが見えなくなるまで白球を追う選手たちの姿は、ずっと昔から変わらない。



ソフトテニス部顧問
南 力蔵 先生
【みなみ・りきぞう】

能 都中学校ソフトテニス部は今年、北信越を制して団体戦で全国大会6回目の出場を果たしました。団体の結果はベスト8、個人でも準優勝することができました。過去には平成12年の団体準優勝や、個人では2回日本一の栄冠を手に入れています。

いってくれた先輩たちや指導者に感謝せずにはおられません。現在の部員数は1年生女子が7人と少ないですが、月曜日と水曜日の週2回は能都北辰高校の部員と合同練習も行っています。「練習が厳しいのでは」とよく質問されますが、時間はほかの部と変わらず学校で決められた時間に終わり、練習試合に出かけることもありません。

わたしも部員たちも、4月になり新入部員が入ってくることを楽しみにしています。テニスの経験は問わないし関係ありません。新入部員を迎えて「学校生活が1番で、テニスは2番目」「先輩と後輩の壁がなく、先輩が優しい」などの能都中学校ソフトテニス部の伝統をこれからも守っていききたいと思っています。



ソフトテニス部顧問
矢知 寛幸 先生
【やち・ひろゆき】

能登町は藤波台のテニスコートという物質的な環境だけでなく、周囲からの応援という精神的な環境も整っていると思います。生徒たちにとっても、礼儀や協調性などソフトテニスから学ぶことはとても大きいのではないのでしょうか。

小中学校と連携して

能登町は藤波台のテニスコートという物質的な環境だけでなく、周囲からの応援という精神的な環境も整っていると思います。生徒たちにとっても、礼儀や協調性などソフトテニスから学ぶことはとても大きいのではないのでしょうか。

第2章

受け継がれる

DNA

少子化の流れの中で年々減少するテニス人口。それでも能登町の子どもたちは白球を追い、ラケットを振り続けている。伝統を受け継ぎながら、進化するDNAをこれからも応援していききたい。

子どもたちの活動の場である少年団や学校の部活動。それぞれの現状や選手たちの気持ちは――。

能登ソフトテニススポーツ少年団



母集団会長
下島 宏信 さん
【しもはた・ひろのぶ】

現 在、能登ソフトテニススポーツ少年団の団員数は小学2年から6年までの24人(男10人・女14人)となっています。わたしたちが住む瑞穂地区では、スポーツをやりたい場合はソフトテニスしかありませんでした。それでも兄や姉の姿を見て、あこがれた下の子どもたちは自分からテニスをしたいと話してくれました。ほかの団員にも兄弟でソフトテニスをする子が多いです。

子どもの成長を感じる

子どもたちはほとんど毎日学校や藤波台で練習しています。毎日ラケットを抱えて通学する様子を見ると、本当に「白い球」が大好きなんだと思います。練習はすべてコーチに任せていて自分たちは迎えに行くのですが、たまに練習を見るときはと前までは取れない

かったボールを打ち返せるようになっていたり日々子どもたちの成長を感じることができま。練習や試合はできるだけ見に行きたいと思っていますが仕事の都合もあり、なかなか行けないことが悩みですね。そんな時は迎えをほかの保護者にお願いしたりと親同士がお互い協力しながら子どもたちを応援しています。

頑張る子どもたちをサポートしたい

スポーツ少年団活動では、子どもたちはいろいろな経験をします。特にソフトテニスは毎年のように全国大会へ出場するなど、なかなかできない体験をさせることができます。遠征には費用もかかりますが、それでも行くだけの価値はあると信じています。

一つのことには打ち込むということは、きっと子どもたちの将来のためになります。母集団として、これからも頑張る子どもたちをサポートしていききたいと思っています。

自分を超えてくれた
子どもたちに
感謝している。



あるテニス一家の物語

吉岡 武さん

Yoshioka Tsuyoshi

【よしおか・つよし】宇出津

妻の智子さん、長女みのりさん、長男翔太さんの4人共に能都中一宇出津高校（北辰高校）でテニス選手として活躍。飲食店経営、50歳。

山田良平先生に鍛えられ
今の自分がある

わたしは小学5年生のときソフトテニスを始めました。身近な野球や卓球とは違って新鮮な感じがしておもしろかったと今でも記憶しています。

そのまま中学、高校とソフトテニスを続けました。中学校時代は3年生のときに全国大会で個人ベスト8、宇出津高校では3年生のときにインターハイ団体3位になりました。

当時宇出津高校は山田良平先生が指導していて、テニスをするために宇出津高校に来る人もいました。山田先生の練習は本当に厳しかったです。「全国で優勝する」ということを頭に入れて常に上を目指した練習でした。厳しく鍛えられたおかげでどんなことにも耐えられるという自信が付き、その後の人生において本当に役に立ったと思っています。

DNAを感じた
子どもたちのテニス

高校卒業後は調理師を目指し大阪へ行き、10年間過ごしました。その後金沢のホテルに就職し34歳のときに故郷である宇出

津に戻ってきて、みのり（長女）と翔太（長男）にソフトテニスを勧めました。子どもの練習には付き合いましたが家庭内ではテニスの話は禁句状態でしたね。子どもなりに親とコーチの言うことが違うと感じていたようです。

二人とも宇出津高校に進学し国体やインターハイで活躍してくれました。このころは自分がやるよりも楽しく、面白かったですね。ほかの父兄と声を枯らして応援したことは何とも楽しい思い出として残っています。二人のテニスは、体ができてから自分の現役時代と同じテニスをするようになりました。DNAでしょうか、打ち方もスタイルも本当に似ていました。

みのりは高校卒業後、翔太は大学卒業後に実業団に入りました。子どもたちには「3年間は我慢しろ」と言ってお実業団に行かせました。

みのりとは帰省したときに藤波に行つて乱打をしたりシングルの試合をしたり、小中学生に混じって一緒にテニスをしました。翔太も帰ってきたときは中学校や高校に顔を出しているようです。今では翔太はわたしのレベル

遊びのテニスも楽しいと
伝えたい

わたしは親として、子どもの応援に一生懸命になるという経験をさせてもらい、全国いろいろな所に連れて行ってもらいました。テニスを通じて親同士のつながりもできました。子どもたちに感謝しますし、テニスをやらせて本当によかったと思っています。

今の自分が子どもたちに言えることは「遊びのテニスも楽しい」から、歳をとつても続けてほしい」ということだけです。



「軟式庭球」という雑誌の表紙を飾った昭和51年インターハイでの一幕（写真中央が吉岡さん）

「宇出津からテニスの灯を消したくない」と話す西吉和さんは、指導者になつたきっかけを「自分は学生時代に清田清吉先生、太島彰信先生に教わり、指導者に恵まれていた。そういう指導者に対するあこがれがあった」と振り返る。

「小学生にはテニスの楽しさを、中学生には勝つ喜びを教えたい」という西さんだが、現在宇出津小学校でテニスをする児童は1人、中学校も1年生7人だけという状況だ。

「子どもたちは毎日一生懸命練習している。宿題もしっかりさせるし、塾に通っている生徒もいる。親から見れば安心して子どもを預けられる場所じゃないかと思う」と話す西さん。テニス人口増加のため、子どもたちが強くなるためには「親の理解も必要」と訴える。

「子どもたちにはテニスで鍛えた根性を生かして、最後まであきらめない人間になって欲しい」と願い30年以上指導を続けてきた西さんは、あと2年で定年退職を迎える。「清田先生は80歳近くまで片腕でラケットを振っていた。自分も体が動く限りテニスを指導したい」と考えているが、そのためにはソフトテニスの底辺拡大という問題がある。

「自分が教えた選手が母親になり、その子どもたちも保育所に増えてきている。退職したら保育所の子どもたちを集めてテニスを教えたい」と笑う西さん。「テニスの灯を消さない」ために、まずは目の前の子どもたちを精一杯指導することで「ソフトテニス強い町」を作り続ける。

【にし・よしかず】 崎山 公務員。スポーツ少年団の指導者として全日本大会で5回の個人優勝などに導く。現在は能都中学校の外部コーチ。57歳。

西 吉和
Nishi Yoshikazu

指導者の思い

「あ いさつができること、そして元気よく」。これが能登ソフトテニススポーツ少年団と鶴川中学校を指導する當日昌次郎さんの指導方針だ。

ソフトテニスの練習はほとんど毎日、藤波台や学校のコートで行われる。練習中は厳しく叱ったり、優しく声をかけたり、冗談を言ったりと見ている方もおもしろいと感じる。厳しい練習というイメージもあるソフトテニスだが「つらい練習まではやっていない。子どもたちもついてきてくれている」と話す當日さんには「子どもたちに勝つ喜びを教えてあげたい」という強い思いがある。

少年団も中学校も目指すは「全国」。當日さんは長年の指導経験からどうすれば全国にいけるか分かっているという。「最近ではほかの地域のレベルも上がってきた。それでも練習をしっかり

やれば小学校も中学校も全国大会に出場できる」と言い切る。

當日さんにも悩みはある。地理的条件から練習試合が組めず試合経験が乏しいことと子どもたちの人数が年々減っていることだ。「子どもがソフトテニスをやりたいと言っても、親が反対する場合もある。それだけが寂しい」という。

「指導する子どもたちは自分の子どもだと思っている」と話す當日さんに指導を続けてきた理由を聞いた。

「勝って帰ってくる子どもたちの笑顔が忘れられないから」。

そう話しながらも、當日さんの視線は常に白球を追う子どもたちに注がれていた。

【とうめ・しょうじろう】 鶴川 自営業の傍ら昭和53年から少年団の指導者として活躍。平成3年からは鶴川中学校の外部コーチも兼ね、小中学生を何度も日本一に導く。54歳。

Toume Syoujirou
當日 昌次郎



Jun Kamiwazumi

能登町テニスのDNAを受け継いだ 最高のプレーヤー「神和住純」

今年で7回目を迎えた「神和住純エンジョイテニスフェスティバル」が10月6・7日、健民テニスコートで開催された。大会では県内外から訪れた約100人がプロとの交流や試合を楽しみ、レセプションでは能登町の味覚を満喫した。

今回、来町した神和住さんに能登町への思いやテニスのまじぶくりについて話を伺った。

Q 能登町との縁は？

A わたしの父である正が宇出津、母が旧鹿島町の出身であることから、子どものころはたまに帰って故郷の空気に触れていましたしキリコにも乗ったことがあります。神和住という地名もあります。元々は神和住の出身で自分のルーツを調べたことでもあります。

父からは宇出津小学校で先生たちに教えられてテニスをしてきたことや、宇出津の港からラケットを振りながら出征して

いった話などを聞かされてきました。また不思議な縁を感じたのが、わたしが進学した法政大学のテニス部コーチが松本武雄という穴水町出身の人で、父親の小学校時代のライバルだったということです。

Q 硬式に転向した理由は？

A 両親共に軟式でしたから中学では軟式テニスをしていて東京都で3位くらいになりました。高校進学時に「硬式で強くなれば世界に行ける」と思い、強かった法政二高に入ることを決めたのです。今は4歳くらいで始めてジュニアでプロになる時代、15歳から始めてプロになった選手はほかにいないですね。

Q 硬式と軟式の違いは？

A グリップから何から全然違いました。だから第1球目から直されましたね。それで2年半でインターハイ優勝ですから、もう半端じゃないくらい練習しま

した。それくらいしないと全国制覇できませんから。その後大卒までの7年間、ずっと自分の青春はテニスコートの中で過ごし、そこで鍛えられましたね。

Q テニスの町について

A わたしの父親の時代から小学生に軟式テニスを教えていたこと、町民みんながテニスを楽しんできた文化があること、そしてこれだけの施設があるということはずいぶんいいことですね。町のPRをしていく中で「テニス」というものが大きな柱になると思います。

Q エンジョイテニスについて

A わたしたちプロは勝負の世界で生きてきて試合を楽しむというところは経験したことがないわけですけど、この大会は負けてもいい。負けたら悔しいですけど相手も同じ条件ですし、来てもらった人を楽しんでもらえればいいという大会。わたし自身

も毎年楽しみにしています。

Q テニス資料の寄贈について

A ここにテニス資料館があることは知っていました。担当の方から資料を寄贈してほしいという話があって、父の資料を故郷に飾ってもらえれば父も喜ぶだろうし、自分の資料も町に引き取ってもらえることはすごくうれしいことでした。能登出身の人間として、活躍したことが少しでも刺激になってもらえればと思っています。

Q テニスのまじぶくりについて

A わたしが協力できることとしては、前から話がありました。が選手の育成に一役買いたいということがひとつ。そしてテニス



藤波緑地センター内に展示された神和住さん寄贈のテニス資料

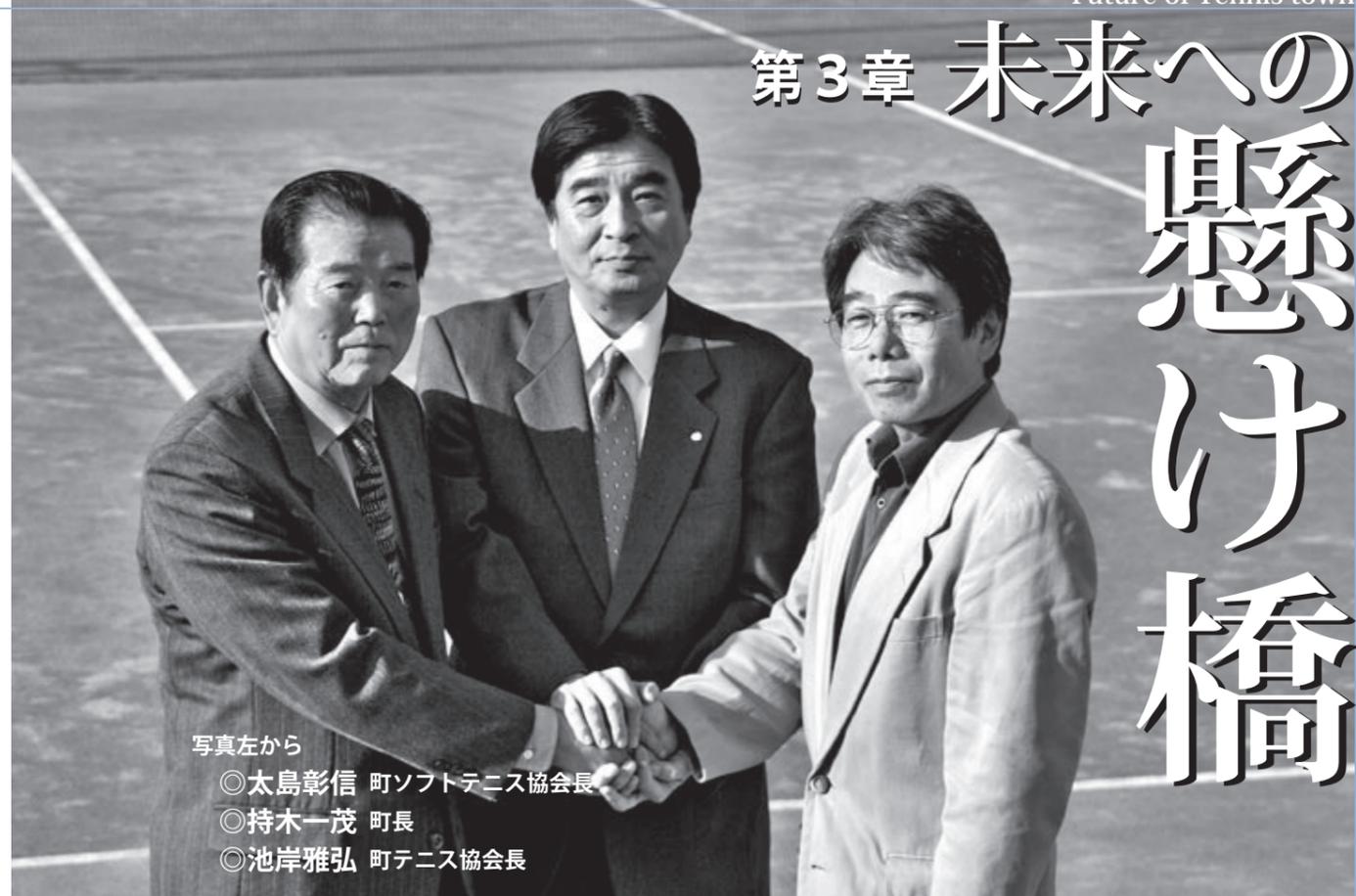
テニスの土壌があること
すばらしい施設があること
国際大会が開催できること
すべて『誇り』に思っています。

【かみわずみ・じゅん】

高校で硬式テニスに転向し、インターハイ完全優勝、インカレ3連勝、全日本選手権3連勝を飾るなど日本のトッププレーヤーとして活躍。1973年に日本テニス史上初のプロ選手となる。世界4大大会に出場し、当時世界1位のスタン・スミスを全仏・全米プロで2度破る。1986年に現役を引退、プロ・アマを含めた通算優勝回数は115回を数える。

現在は母校である法政大学教授を務める。東京在住、60歳。

第3章 未来への懸け橋



写真左から

- ◎太島彰信 町ソフトテニス協会長
- ◎持木一茂 町長
- ◎池岸雅弘 町テニス協会長

テニスのまちづくりには町とテニス関係者、そして住民の連携が欠かせない。今後の鍵を握る3人に、その思いを聞いた。

「能登町におけるソフトテニスの統や歴史については？」

持木 ●旧能登町は、地元の選手が強かったこと、施設が整っていたこと、優れた指導者がいたことなどからソフトテニス盛んでした。そしてこの大切な資源を生かして町づくりが得意ないかという思いで、今まで取り組んできました。過疎化が進む現在の能登町で交流人口の拡大を考えた時、「テニス」で人を集めることが一番なのかなと思っています。良い伝統を受け継ぎながらこれからは「テニスのまちづくり」を推進していきたいと考えています。

太島 ●旧能登町のソフトテニスの歴史はいつかの時代に分けて考えられます。まず創生期と呼べるテニスが町に伝わった時代、とにかくテニス面白くからみんなで親しんでやろうとクラブが誕生して、県下の小学生大会で活躍するようになったんです。そのルーツが井東さんであり、活躍した人が神和住さんたちでした。そして戦後、第2回石川県体をきっかけにソフトテニス復活しました。雨や雪が多い地理的不利の中、なんとか全国の壁を破りたいと指導

太島

をするという環境はソフトテニスのおかげで整備されていたと思います。選手面に関してもわたしを含めソフトテニスから転向した人間が半数以上います。きつちりと基礎ができていた人たちが入ってきているという状況です。神和住さんなどソフトテニスから硬式テニスに転向したプロもたくさんいますし、自分たちはソフトテニスの基礎があったおかげでスムーズにやってこれたのかなと思います。

池岸 ●ソフトテニスに関しては、冬場でも練習できるように体育館も整備されていきましたし、今ではWAVEもあります。これは先人たちの努力と町や住民のみなさんの理解があったからだと思っています。

池岸

脱却できていないともいえます。

太島 ●これは硬式と軟式の発祥の違いが大きいと思います。ソフトテニスは日本人がゴムボール、軽いラケットを開発し、学校の先生たちが全国に広めていった経緯があります。硬式は地域ごとのクラブという形で広がっていったのです。

太島

ソフトテニスは、学校の先生が運営する大会を開催してもらったりして、普及していったというのがありますが、最近は先生も広域化して昔のように地元の先生が地元の子どもを教えるということが難しくなりました。それがテニス人口が減っているひとつの原因になっていると思います。ソフトテニスだけでなく、アーチェリーやドッジボールなど能登町の特徴あるスポーツを作っていくために、理解があり指導者になりうる先生を赴任させてほしいと願っています。(次ページに続く)

太島

●確かに能登町の子どもたちは冬でもWAVEで練習できます。これだけの環境は県内には少ないし、優位性があると思います。

池岸

●わたしがソフトテニスをやってきた中学時代は、小学校からクラブがありました。ほかの地域では中学からソフトテニスを始めることがほとんどでしたので、大会ではその差は歴然でソフトテニスに関しては本当に先進地だと思いました。

旧能登町の硬式テニスに関しては、ソフトテニスが一番盛んなところにクラブが立ち上がりました。瑞穂地区にナイターができるコートがあり、16面やWAVEもでき、テニス

日本唯一の「テニス博物館」という夢をもつて、これからもテニスの底辺拡大、大会誘致に努めていきたい。 —持木



持木一茂 能登町長

【もちき・かずしげ】学生時代はサッカーに打ち込みソフトテニスの経験はない持木町長だが、2人の娘はソフトテニスの選手として活躍している。



石川県ソフトテニス連盟 井上 清一 理事長 (鶴川出身)

昭和48年、宇出津高校卒業と同時に故郷を離れ、今思うことは育て励ましをもらった能登町への感謝です。現在は石川県ソフトテニス連盟の理事長として県内のソフトテニス発展のために活動していますが、周囲のみなさんの要請に応えることで自分自身を育て支えてくれたソフトテニスに恩返しをしたいとの思いからです。

振り返るとその思いは高校時代の山田良平先生との出会いからです。山田先生の「日本一を目指そう」という掛け声と厳しい指導で、北信越の頂点を極め、全国でも上位へと進出することができました。その指導の厳しさはもとより生活面、人間としての成長も教わり社会人となった今でも人生の大きな礎となっています。

母校である能都北辰高校は過去に山田先生指導の下、高校日本一の選手を輩出していますが近年全国での活躍は振るわず、わたしたちの応援のあり方も反省しています。もう一度日本一の選手が育つように、自分を育ててくれた故郷への思いを込めて精一杯の応援をしたいと思っています。

テニスの町能登町は、小学生・中学生が全国トップレベルとなっています。指導者や関係者のみなさんに感謝し、また誇りにも感じています。「小学校、中学校、高校、社会人すべての部門の日本一を能登町から」はそう遠くないと思っています。

Column ②

「テニスの聖地」を目指す千葉県白子町



千葉県白子町
林 和雄 町長

雄大な太平洋に面した千葉県九十九里浜。その南部に位置する白子町は、人口13,000人余り、面積約27km²の農業と観光の小さな町です。農業は特産の玉ねぎや落花生に加えて、近年は温室栽培によるトマトやサラダ菜、ガーベラなどの栽培が盛んで県内一の規模を誇っています。

白子のテニスの歴史は、昭和52年の19面建設から始まりました。そして温暖な気候と平坦な地形を生かし、コートは10年近くで400面にまで増設され全国屈指のテニスリゾートとして知られるようになりました。その後は順風ばかりではなく、テニス人口の減少や景気低迷など難問が押し寄せ、サッカー場やグラウンドゴルフ場に衣替えしたものもあります。

しかし白子といえばやはりテニス。30年かけて習得した大会運営のノウハウが評価され、年間を通してさまざまな大会が開催されています。平成17年千葉きらめき総体のソフトテニス競技会場として成功を収め、平成22年の「ゆめ半島千葉国体」の開催も決定しました。また子どもたちのスポーツ拠点づくり推進事業として、毎年春休みに全国小学生ソフトテニス大会を開催し、強豪である能登町の選手や父兄のみなさんにも毎年のように白子に来ていただいています。白子町は「テニスの聖地」を目指して、地域を挙げて取り組んでいます。



太島彰信 町ソフトテニス協会長

【たじま・あきのぶ】 崎山
元教員であり、昭和34年の瑞穂中学校赴任時から本格的にソフトテニスの指導にあたる。以後旧能都町の小中学校テニス部顧問を歴任し退職後も宇出津高校を10年間指導する。現在は松波中学校の外部コーチを務める。



池岸雅弘 町テニス協会長

【いげし・まさひろ】 宇出津
能都中学校、飯田高校時代はソフトテニスの選手として活躍。東京から地元に戻り28歳で硬式テニスに転向。平成6年4月から町テニス協会長を務め、硬式テニスの強化・普及にあたる。

合宿所を整備してテニスのメッカに。能登空港を使って交流人口を拡大するこ

とができるかが大事。――太島

持木 ●北辰高校については県の方にお願

いしたことがあって、今は米沢先生が来てくれています。

池岸 ●現実問題として、部活のために学校の先生を配置するということは難しいのではないかと思います。

持木 ●今は西さんや當目さんがいてくれるからいいと思いますが、その次の指導者が問題になりますね。

池岸 ●そう考えると総合型スポーツクラブの指導者という考えが必要になるのではないのでしょうか。今後は指導者の養成ということも考えていかなければならないと思います。

太島 ●わたしは指導者の養成も必要だと思えますが、学校の部活はやはり学校の指導者が中心になるべきで、外部コーチに頼り切りではないいけないと思います。学校の先生には自分の信念で生徒を指導してほしいですね。
「硬式テニスを含めた交流人口の拡大については？」

持木 ●ソフトテニスは今まで大きな大会を誘致してきました。硬式では大きな大会をやったことはなく、定期的な大会をやっていくのが関西薬学の硬式の大会ぐらいです。神和住純杯エッジョイテニスは人数は少ないですが県外からも来ているので、テニスを通じて能登町の良さを知ってもらう、そして観光につながればと思います。
能登国際に関しては、石川県で初

プロとのつながりは財産になる。課題は

自分たちのノウハウをいかに高めていけるか。今は基礎固めの時期だと思う。――池岸

めての国際大会を今年開催しました。これが1回だけの大会ならば何の意味もなくなると思っています。せめて3回、4回開催して判断してもらいたいと考えています。来年以降の大会では、地元の人何らかの形で関わっていくことができれば町を挙げての大会にできると思うし、テニスの底辺を広げることにもなります。そういう意味では続けることが大事なのかなと思っています。

池岸 ●交流人口に関しては、能登国際にしても神和住杯にしても、外から来た人がまず言うのは「海の見える環境のもとでテニスができる」ということはそんなにあるものではない」ということです。せっかくすばらしい施設があっても、まだ稼働率が低いのではないのでしょうか。もっともつと外の人が利用してもらわないといけない。それをアピールするいいきっかけになったと思います。

池岸 ●硬式テニス協会は週2回内浦と藤波で初心者教室を開催しています。小学校低学年から70歳くらいの高齢者まで、楽しみながらやっています。こういう活動を続けながら生涯スポーツとして地域に定着させ、選手や指導者が出てくればと考えています。そのためにはまだまだ基礎固めの段階です。

太島 ●ソフトテニス協会の使命として、波及する可能性もあります。
「これからの活動や目標は？」

池岸 ●硬式テニスを週2回内浦と藤波で初心者教室を開催しています。小学校低学年から70歳くらいの高齢者まで、楽しみながらやっています。こういう活動を続けながら生涯スポーツとして地域に定着させ、選手や指導者が出てくればと考えています。そのためにはまだまだ基礎固めの段階です。

太島 ●ソフトテニス協会の使命として、

り、どうすればプロになれるかということにもつながるので、大きな財産になると思っています。

太島 ●わたしは16面という財産があるのだから、これを使って町に還元しなければいけないと思っています。硬式もやるようになってから県のテニス協会に働きかけて毎年シニアの大会を能登町で開催するようにしたい。今では利用率は硬式の方が高いのかもしれない。

池岸 ●ソフトテニスよりも硬式の方が余暇で遊びに来るというイメージがありますよね。

太島 ●だから能登空港を使っていかに関東から呼び込むかが大事なんです。今はまだ合宿にしても関西の大学や高校が多いと思います。能登国際の際に伊良子ダイレクターが「能登は空港があるから近い」と言っていました。もう少し関東へのアピールが必要なんじゃないでしょうか。そして体験・観光・宿泊施設と総合的にメリットを打ち出せば、来て良かったとリピーターになりますよ。

持木 ●能登町も公社の職員が中心となって関西方面の学校へは合宿の誘致を

選手の競技力の向上、ジュニアの育成・指導、楽しむテニスの普及、大会誘致による町の活性化などがあり、過去・現在それぞれの分野で努力してきましたが、問題点や不足面もあります。

持木 ●最近ではテニスを続ける若者も増えてきました。今こそ若い力を結集して広域な普及と力強い躍進が必要な時期だと考えています。みんなで協力し合い、頑張っていきたいです。

持木 ●テニスに関してのわたしの夢は、表先生(神戸松蔭女子学院大学教授)や神和住さんから寄贈していただいた貴重な資料を生かして日本初の「テニス博物館」を作ることです。これからもテニスの底辺拡大と大会誘致を図りながら、テニスを通じて能登町の良さを全国にアピールしていきます。お二人には今後ともテニスのまちづくりにご協力をお願いいたします。

おはあちゃんへ
ありがとう♡

自分のおばあちゃん家に泊りに来ためでたいで
とても楽しかったです♡ ごちそうになった新築のお
また食べたいです♡ また来年お世話になりにおま
ありがとう ごさいます!! 前川綾香

1週間本当にありがとう
ございまして!! お悪い
超り多かったです!!
来年試合があれば
おばあちゃん家に泊りに
来ますね! ありがとう
ございまして!! 夏美

今年1週間本当にありがとうございました!!
おばあちゃんに泊りに来てくれて
本当に楽しかったです!!
来年もぜひお誘いください!!
おはあちゃんに感謝!!
来年は必ずお誘い!!
田中

今年6月に開催された「能登国際女子オープンテニス」で宿泊した選手らが残したうちわ

第4章 テニスとの共生

能都健民テニスコート完成後、毎年のように全国規模の大会が開催され町は選手で溢れた。テニスで活性化を目指した町をコートの一番近くで支えてきたおばあちゃんの思い。

谷 スミ子 さん

【たに・すみこ】 藤波 昭和48年から健民テニスコートに一番近い場所で民宿を営み、試合に挑む選手たちを支えてきた。75歳。

じ。とにかく子どもたちに腹一杯食べさせてあげたい」とたくさんのご飯とおかずを並べるそうだ。そんな谷さんのこだわりが刺身。「海の側の民宿だからお客さんには刺身を食べてもらいたい」とのこと。しかし国体などの大きな大会では、選手の健康管理のために生ものは禁止されることも多い。

今年始めて開催された「能登国際女子オープンテニス」では、谷さんの民宿に選手や監督4人が素泊まりで宿泊した。「何も儲けなかったという人もいるけどわたしは素泊まりの方が楽。選手といろいろな話をして

テニスコートに続く70段の階段 この階段を上る選手たちをずっと見守ってきた。



全国から訪れる選手を温かく迎える 昭和58年、藤波台に16面のテニスコートが完成して以来、毎年のように全国規模の大会が開かれるようになった。数千人規模で来町する全国大会を開催するには、町、協会、そして選手

海側の民宿だから 活きた刺身を食べさせたい 谷さんの自慢は料理だという。特に名物料理があるわけではない。「特別なことは何もしていない。メニューもいつも同

本当に楽しかった」と振り返る。そして最終日には谷さんの気遣いで夕食を用意した。とても喜んでくれたという選手たちは、帰り際に「来年も大会があったら必ず来ます」といってプーケとメッセージを書いたうちわを谷さんに贈った。「上手言うたのかもしれんけど、気持ちがいい感じがした」と大事にしまっておいたうちわを眺めながら話してくれた。

比べても今年は本当に少ない」という状況。それでも民宿をやめようと思つたことはないという。「民宿は家の中の仕事なので年寄り一人でも何とかできる。何よりお客さんと話をするのが楽しいから。」



パッチワークが趣味という谷さん。選手が泊まる部屋にも手作りの掛け軸などが飾られている

国体開催から16年が経過し、大会を取り巻く環境は大きく変わった。車社会が進み、鉄道が廃止されたことで七尾や金沢方面の学校がほとんど日帰りで試合に来るようになったのだ。その結果、大会利用者数は横ばいながらも宿泊するテニス客は年々減少していくことになる。現在町内の宿泊施設の数も昭和60年からほぼ半数にまで減り、収容人員は3000人超から1500人弱にまで減少した。テニスだけではなく、能登半島全体の観光客数の減少や経営者の高齢化などさまざまな要因が重なった結果でもある。

谷さんの民宿でも「数年前と



【やまだ・りょうへい】
師範学校卒業後東京都で教員となるが太平洋戦争に出征、戦後地元に戻りソフトテニスの指導に情熱を傾けた。昭和45年から宇出津高校専属コーチとなり、同校を全国レベルに押し上げ54年に日本一に。全日本小学生大会やインターハイ誘致の先頭に立つなど、町ソフトテニスの発展に生涯を捧げた。昭和60年死去、享年64歳。

テニス 列伝Ⅲ 山田良平

Yamada Ryouhei
(1920 ~ 1985)

山田先生は大正9年旧鶴川町で生まれ、東京の豊島師範学校(現東京学芸大学)に進学した。在学中はテニスに熱中し、東日本大会をはじめ多くの大会で優勝したが全国大会での優勝はできなかったという。

戦後、故郷に戻り中学校の教員となるが体調を崩し退職。書籍・スポーツ用品店を営みながら地元中学校を指導した。昭和45年、依頼を受けて宇出津高校の専属コーチとなった山田先生は「日本一」という目標を掲げ「鬼の山田」となる。地元中学校からも才能ある選手が集まり、以後16年の間に石川県高校選手権男子団体10連覇、女子6連覇など宇出津高校の黄金時代を築き上げた。

山田先生は「テニスは人づくりの道具」といい、テニスを通じた人間づくりを目標とした。厳しい練習はテニス部員の忍耐力や精神力を養い、また事あるごとに「テニスバカになるな」と勉強にも力を入れた。そして山田先生の指導を受けた生徒たちは高校卒業後も大学、実業団で全国や石川県の中枢選手

「俺」 はこれでいつ死んでもいい。昭和54年8月、滋賀県長浜市で行われたインターハイソフトテニス競技の閉会式終了後、山田良平先生はこうもらしたという。「能登から真の日本一の軟式選手を育てたい」と夢見て、宇出津高校専属コーチとして指導してきた山田先生10年目の悲願達成だった。

昭和58年完成の健民コートは山田先生の「能登でインターハイを」という願いの結晶だった。大会誘致の先頭に立ってきた山田先生だったが、大会の半年前に肺ガンのためその生涯を閉じた。インターハイで宇出津高校ソフトテニス部が、山田先生の遺影を掲げ奮闘したことは今も語り草となっている。

インターハイ終了後、山田先生を顕彰しようと多くの寄付が集まり、16面のコートサイドに銅像が建立された。

『目標を掲げ努力すれば必ず夢はかなう』。山田先生は今でも、健民コートで日本一を目指す選手たちとソフトテニスの未来を見守っている。



昭和54年、インターハイで優勝し念願の日本一となった列崎満選手(左)・石田茂樹選手と握手を交わす山田先生



高峰 博保 さん

【たかみね・ひろやす】

(株)グルーヴィ、プランニングディレクター。企業の経営戦略、ショップ開発、商品開発などに携わりながら、自治体の長期計画立案やグリーンツーリズム構想、まちづくりに企画面で参画する。

再考から再興へ

交流人口は この町に何を もたらすか？

合宿、大会、応援など、テニスが目的で能登町を訪れる交流人口は年間約3万人と試算されている。その経済波及効果について町づくりの専門家に聞いた。



ベントや大会での経済波及効果を考えた場合、まず「誰が来るか」ということがポイントになります。大人と学生では使うお金に当然違いが出てきます。ただ子どもの場合は親が付いてくることもあるので、プラスアルファの効果が期待できると思います。つまり同じスポーツ大会でもどういう人を誘致するかということを経営的に考えていく必要があるのです。

それでは中高生はお金を使わないからダメかというわけではなく、中高生は親が付いてきていない分、民宿の人や地元の人との交流が期待できます。大会や合宿で長く宿泊すればするほど人間関係が濃くなります。そうすれば大きくなったときに懐かしがって家族を連れてきてくれる可能性もあります。経済効果としての即効性はないけれども長期的に見たときにリピートしてくれるということがあると思います。

これは地域のファンを作るといことです。そうすれば何か事があったときに能登の物を利用しようとか、能登の物を優先的に買ってくれたりとか、今回のような震災のときに応援して

大会は地域を知ってもらう絶好の機会

ほかによく言われていることが「アフター」の話です。大会があつて試合が終わってすぐ帰るといふパターンと、せっかくなので来たんだからもう1泊して能登をゆっくり観光してから帰るといふパターンが考えられます。特に遠方から来たお客さんはそういうプラスアルファの行動を取りやすいのです。

できれば、お客さんにとつても、地域にとつてもプラスになるのではないのでしょうか。

**テニスと地域の魅力が
いかにつながるか**

商工会や観光協会とタイアップして詳しい情報、お土産であれば作り手の顔が見えるような情報が提供できる印刷物を作って配布すれば、必ず売り上げは上がります。お客さんと交流する宿泊施設の人にもちゃんと理解してもらつて情報提供してもらえれば、それがつながっていくと思います。

テニスによる経済波及効果をより拡大するためには、テニスと地域の魅力をいかにつなげるかが重要なのです。



山田先生は、
藤波台地からテニスの未来を
見守り続けている。

取材を終えて

「テニス特集」企画は、1冊の資料と
の出会いから始まった。旧能都町が平成10年に発行した「能都町ソフトテニスの歴史」。この資料には明治から大正、昭和、そして平成へと先人たちがソフトテニスを普及・発展させようと汗と涙で築きあげた90年の歴史が刻まれていた。「これはぜひ特集として住民のみなさんに伝えたい」と強く思い、特集の企画書を作った。ソフトテニスの歴史、先人たちの思い、全国トップレベルを保持している子どもたち、町の活性化、企画はどんどんふくらんでいった。

テ

ニス人口は減少し続けている。宇出津小学校でテニスをやる児童が1人、鶉川小学校でも低学年になるほど人数は少ないという状況だ。このままでは数年後にこの町から「テニスの灯」が消えるかもしれない。完全に消えてからは遅い。今ここで、もう一度テニスについて考えてもらうきっかけになればと願いながら取材、編集をした。

も

取材では藤波台のテニスコートに何度も足を運び、練習に汗を流す子どもたちを見ることができた。体に見合わない大きなラケットを楽しそうに振り回す低学年、基礎ができておき、テニスらしいラリーを続ける高学年、そしてボールに力強さが増す中学生。それぞれが自分のレベルに合わせてテニスを楽しみ、少しでも上手く、強くなろうと頑張っていた。スポーツに限らず、上を目指すには素晴らしい師に出会うこと、そして競い合うライバルの存在が必要だ。ソフトテニスにはすばらしい指導者がいる。あとは自分でライバルを見つけ、お互いを高め合ってほしい。

新

「新しいテニスのまちづくり」は行政やテニス関係者だけではできない。高峰さんが話したとおり、今後さらなる交流人口の拡大を目指すためにはテニスと町の魅力をつなげなければならぬ。そのためにはテニスをまちづくりにどう生かすかということとを、行政、テニス関係者、宿泊施設、観光協会、商工会、そしてこの町に住むわたしたちが共に考え、知恵を出し合うことが必要になる。まずはテニスについて知ってほしい。そして大きな大会があればテニスコートに足を運び、一生懸命頑張っている地元の子どもたちを応援してほしい。「ゲームカウント、ラブオール(0対0)」。

新しいテニスのまちづくりを今から始めよう。

【特集・百年目のラブオール(完)】

新しいテニスのまちの 始まりを告げる 百年目の 「LØVE ALL」

【参考資料】
能都町ソフトテニスの歴史、石川県ソフトテニス連盟 50 年誌、
能都町明治百年記念写真集、能都町史、太島彰信氏資料、
馬渡武久氏資料、武淵一男氏資料、能登町ふれあい公社資料